

# 理想的な労働者像が生み出す「自発」と「強制」

## －日本の戦中・戦後における労働観の変遷と過重労働－

中山 仁人

本稿では、労働者にとって負担であるはずの過重労働がなぜ許容されてしまうのかという問題意識から、そうした過重労働へと労働者を駆り立てるものとして労働の理想的な在り方としての労働観があるのではないか、という仮説を立て、その検証を行った。

なぜ本稿では労働観を、労働者を過重労働へと駆り立てる要素として捉えるのか。それは、本稿での分析において、過重労働に至る過程で労働者に要求される「強制」と「自発」という要素に特に注目するからである。過重労働は、企業から要求される異常なノルマをこなすために引き受けざるを得ないという側面がある。こうした側面から過重労働は、「強制」されるものとして読み取ることができる。しかし一方で、過重労働を「自発」的なもの、労働者の責任感の現れとして評価する声もある。労働者がなぜ過重労働に至るのかという分析は、こうした「強制」と「自発」という要素が、労働者の内面にどのように現れてくるのかという分析を行わなければ解明することができない。そうした労働者の内面を分析するために、本稿では労働観に注目し、それが労働者の内面で「強制」と「自発」とを共に生み出すという仮説を立てる。本稿の分析においては、労働観の分析を行い、さらにそれが過重労働に至る過程の「強制」と「自発」という要素にどのように結びついているのか、という分析を行った。それにより、本稿における労働観によって「強制」と「自発」が引き起こされるという仮説と、そうした労働観が過重労働へと労働者を駆り立てるといふ仮説を検証した。

なお、ここで本稿では、次のような概念の定義に基づいて分析を行った。まず本稿における労働観は、労働において理想的とされる在り方を労働観として定義する。多くの社会人にとって、労働は一日の大半を費やす行為である。そして、その労働の目的の一つは生活の糧を得ることである。しかし、それが労働のすべてではない。ときに人は労働に対して意味づけを行う。労働を他者への貢献として捉え、また労働を人生の意味として捉えさえもする。その人にとっての労働

は、その人の考え方、価値観に強く影響される。だが、それさえも労働のすべてではない。理想とされる労働の在り方は、その人の所属する集団・社会や、その人の置かれた環境における規範の影響を強く受ける。その人自身の価値観と、その人の所属する集団の価値観、規範とに強く規定される形で、理想的とされる労働の在り方は形成される。本稿ではそうした、理想的とされる労働の在り方を労働観として定義し分析を行った。そのため本稿では、現実の労働者の姿を分析対象としない。そうではなく、制度等の労働者を取り巻く状況において前提されている、理想的とされる労働の在り方を分析対象とする。

さらに、本稿では過重労働を次のように定義する。本稿では、過重労働を過労死の要因の一つとして捉えている。過労死が引き起こされるのは、時間外にも及ぶ長時間の労働、一切の余裕を無駄として許さない過密労働などによってである。そうした時間的・質的な意味で労働者に異常な負担を強いる労働を、本稿では過重労働として定義し扱っていく。

本稿では四章にわたって、過重労働へと労働者を駆り立てるものとして、労働の理想的な在り方としての労働観があるのではないか、という仮説を立て、分析を行った。その展開は以下のようなものである。第一章では、本稿での問題設定にあたって、どういう観点から労働の問題について分析を行うのかを示した。それによって、能力主義管理における「能力」の無際限な拡大が、過重労働の引き金になっているという指摘や、さらに労働者の意識が能力主義管理の受容に関係しているという指摘を基に、制度を通じた労働観の検討という本稿における研究の道筋を示した。そして、第二章では戦後の賃金体系の分析を行い、電産型賃金体系や能力主義管理における職能給をその対象とした。そしてその分析から、戦後の賃金体系の根底に戦時体制と同型の労働観があることを明らかにした。第三章では戦時の大塚の言説の分析を行い、第四章では戦後の大塚の言説の分析を行った。それによって、戦後の労働者に抱かれる労働観として、大塚久雄の言説にみられるような、全体への自発的な貢献を理想的な労働の在り方とする労働者像があることを明らかとした。それは大塚において、戦時・戦後と一貫して理想とされたものである。そしてこの大塚の示した労働観において、労働者が「強制」と「自発」へと差し向けられる価値観が示されていることが明らかとなった。以上が本稿で明らかとなった点である。